

—— 目 次 ——

文鏡秘府論校勘考—難字・異体字の翻刻について…………… 425

中世の高野山大学を巡る—壇上伽藍探訪— …………… 427

第11回 佛教図書館協会研修会 講演・講義録

平成19年3月31日 発行

当 番 校 種智院大学・高野山大学

第11回佛教図書館協会研修会

文鏡秘府論校勘考—難字・異体字の翻刻について

高野山大学図書館 田 寺 則 彦

①井上靖『澄賢房覚書』『若き日の高野山』（『井上靖歴史小説集』第11巻所収）

・『澄賢房覚書』

「最近『折負輯』という全く今までに誰にも知られていない写本十巻が発見されたということである。その『折負輯』なるものは一口に言えば天保六年までの高野諸寺院の過去帳を輯めたものであって、その資料的価値に至っては量り知れないほど大きいものがあり、取りあえず吉村はそれを書き写しておくことにして」

・『若き日の高野山』

「二十六年の春、『澄賢房覚書』という小説を書くために高野山を訪ねた。(略)親王院に泊めて戴き、水原堯栄、中川善教両師からお話を伺った。(略)古文書の文章には、古文書の文章としての独特の調子があるので、すべて中川師の添削加筆を仰ぐほかなかった。」

②『金剛峯寺諸院家析負輯(ゴンゴウブジョインゲセキフシユウ)』析⇔折

「析負」析薪ヲ負ウ一父が薪を割れば、子がこれを負うこと。子孫が能く父祖の業を継いで失墜しない喩。

・一隅を照らす「照于一隅」⇔「照千一隅」

雖居一隅而光照千里 于、千、干
『照千隅論攷』木村周照編著・青史出版・平成14年11月【添付資料①】

・和同開珎→「カイチン」か「カイホウ」か
珍←珎→寶
『角川日本史辞典 第二版・新版』【添付資料①】

③「魯魚亥豕の謬」か「音通の謬」か
・「和尚打傘」→「無髮無天」→「無法無天」
法もない天もない→無茶苦茶やいたい放題
→「雨傘を手に世間を渡る孤僧」エドガー・スノー・毛沢東インタビュー

④『統真言宗全書』高野山大学統真言宗全書刊行会 会長中川善教

⑤『定本弘法大師全集』高野山大学弘法大師著作研究会

⑥『文鏡秘府論』弘法大師空海撰 6巻(天地東南西北)

・六朝末期から中唐期の文学理論、音韻論、創作技術書のアンソロジー

・『文鏡秘府論箋』維寶編18巻(『真言宗全集』)第41巻所収)加地哲定校訂・昭和11年「諸本の間に着しい異文のあるにも拘わら

ず、それらを挙げていないことが多い。かように妥当を缺く所が少なくないばかりでなく、時には事実無根の校合があつて、およそ半分は信ずべからざるものである。従つてその多大の労力にも拘わらず、学術的資料として殆ど用をなさないのは遺憾である。」(小西甚一『文鏡秘府論考 研究篇上』16頁)【添付資料②】

・『文鏡秘府論考 攷文篇』小西甚一校訂・昭和28年

「今回の校勘作業の過程で、気づいたことがいくつかあるが、とりわけ流布本のなかで、善本とみなされてきた、小西甚一氏の『文鏡秘府論考攷文篇』を照合してみると、その本文に誤字、脱字が、その校異に見落とし、見誤りが、かなり多く発見されたのは、意外であった。(略)その後の日中両国における『文鏡秘府論』研究が総じて小西本を間違いのない校本として踏襲してきたところに、今後の課題をのこしたといえる。」

(林田愼之助「『文鏡秘府論』校勘考」2、82頁、41頁)【添付資料③④】

⑦元禄五年、浪人の藪医者は餞別に何をもらったのか?

『高野山説物語 七之巻 諸牢人橋本江集事』(『続真言宗全書 第41』)【添付資料⑤】

⑧「急」の異体字『新大字典』(講談社)【添付資料⑥】

・完璧な「難字・異体字」の字典はない。

⑨略字・略号一覧『密教辞典』(法蔵館)【添付資料⑦】

・介法印(すけのほういん)→東寺頼寶→介(金剛の略字)→×金剛法印

・汀(灌頂)・ロイ(口伝)・ササ(菩薩)・メメ

第11回佛教図書館協会研修会

中世の高野山大学を巡る——壇上伽藍探訪——

高野山大学 山陰 加春夫

1 中世日本の六大学

1549年11月5日(日本暦天文18年10月16日)に、イエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルが鹿児島で書いた手紙(インドのゴアのイエズス会員宛て)の中に、次のような一節があります。

ここで鹿児島での私たちの滞在について報告したいと思います。(中略)ここからミヤコ(京都)まで〔日本里数で〕三百里あります。その町の大きなことについて私たちが聞かされていることは、九万戸以上の家があること、学生たちが〔たくさん〕いる大きな大学が一つあってこれは五つの主な学院が付属していること、(そのほかに)ボンズ(僧侶)や、時宗と呼ばれる〔私たちの〕修道者のような他のボンズ、アマカタ(尼方)と呼ばれる尼僧たちの僧院が、(あわせて)二百以上もあるということです。

ミヤコの大学のほかに他の五つの主要な大学があって、(それらのうち)高野、根来、比叡山、近江と名づけられる四つの大学は、ミヤコの周囲にあり、それぞれの大学は、三千五百人以上の学生を擁しているといわれています。ミヤコから遠く離れた板東(関東)と呼ばれる地方には、日本でもっとも大きく、もっとも有名な別の大学があって、他の大学よりも大勢の学生が行きます。(中略)

これらの主要な大学のほかに、全国至るところにたくさんの(小さな)学校があると彼ら(鹿児島の人たち)は言っています。これら諸地方が救霊の成果を挙げることができる状態であるかどうかを見極めてのち、〔ヨーロッパの〕主要なキリスト教の諸大学すべてにあてて、私たちの良心の義務を果たし、彼ら(他の人びと)の良心を奮起させるため、手紙を書くのは大して苦勞ではないでしょう。(後略) (河野純徳氏の訳に少し加筆)

フランシスコ・ザビエル(1506-52)は、ナヴァラ王国(現スペイン・フランスの国境地帯)生まれ。日本に初めてキリスト教を伝えた人物として有名です。彼は1549年8月15日(日本暦天文18年7月22日)に中国のジャンク船で鹿児島に来航しました。冒頭に掲げた手紙は、その三か月後に同地で書かれたものです。

一般にはあまり知られていませんが、ザビエルは、パリ大学聖バルバラ学院、同大学神学部ソルボンヌ学院の出身者でした。パリ大学は12世紀末～13世紀前半に成立したヨーロッパ最古の大学の一つ。「教授たちと学生たちのユニヴェルシタス(ユニヴァーシティ、同業組合)」として「自生的に成立した大学」で、13世紀後半には、すでに教養、神、法、医の四つのファクultas(学部)を擁する、「ス

トゥディウム・ゲネラーレ(キリスト教世界全体で通用する教授免許を授与する高等教育の学校)中のトゥディウム・ゲネラーレ」としての名声を確立していました。

ところでパリ大学出身という経歴を持つザビエルが、日本の大学について述べようとする時、当然のことながら彼の念頭には、中世ヨーロッパ型の大学像があったに相違ありません。冒頭の手紙の中にも、「〔ヨーロッパの〕主要なキリスト教の諸大学すべてにあてて」云々、という文章がみえています。

中世ヨーロッパの大学は——パリ大学以外では、北イタリアのボローニャ大学やイギリスのオックスフォード大学などが著名ですが——

- (一) 元来、「学生たちのウニヴェルシタス」、または「教授たちと学生たちのウニヴェルシタス」、すなわち私学としての成立・発展したこと、
- (二) 教師も学生も、その多くが聖職者、もしくは聖職禄の獲得をめざす人びとであったこと、
- (三) ウニヴェルシタス自体は、もともと固有の建物を持たず、むしろその下に形成されたコレギウム(カレッジ・学寮)が主要な教育・訓育の場であったこと、

などのことを大きな特色としていました。冒頭の手紙の中で挙げられている中世日本の六大学は、そのような中世ヨーロッパ型の大学群としてザビエルに認識された、ということができましよう。

さて、冒頭に引用した手紙の中には、中世日本の主要な大学として、①「ミヤコの大学」、②「高野」の大学、③「根来」の大学、④「比叡山」大学、⑤「近江」の大学、そして⑥「板東」の大学、の六校が紹介されています。

このうち、①の「ミヤコの大学」とは、「こ

れに五つの主な学院が付属している」と記されていますから、天竜寺・相国寺・建仁寺・東福寺・万寿寺のいわゆる京都の五山官寺(禅宗)を指していると考えられます。そして天竜寺以下の五か寺は、おのおのが「学院」、つまり京都五山ウニヴェルシタスを構成するコレギウムと見なされていた、ということになりましよう。

②は高野山金剛峯寺(真言宗)に、③は根来寺(真言宗)に、④は比叡山延暦寺(天台宗山門派)に、そして⑥は足利学校に、それぞれ他ならないことが明らかです。ちなみに、足利学校とは、15世紀前半までに足利氏一門によって下野国足利荘(現栃木県足利市付近)に設立された、禅僧が管理する儒学の研修施設。学生は僧侶が大多数で、在俗者も在学中は剃髪しなければならない決まりでした。

よくわからないのは、⑤の「近江(現滋賀県)」の大学です。『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』の訳者河野純徳さんは、「たぶん近江の国木戸にあった浄土真宗木戸派の本山錦織寺であろう」と注を付されています。しかし、必ずしも錦織寺ではなく、天台宗山門派の総本山園城寺を指していた可能性もあるのではないのでしょうか。

「中世ヨーロッパの大学」流にいうならば、

④の「比叡山」大学と②の「高野」の大学は、ともに九世紀に源を發し、10世紀末～12世紀前半に、それぞれ「自生的に成立した大学」、③の「根来」の大学は、13世紀末に、②の「高野」の大学から「分岐して成立した大学」、そして①の「ミヤコの大学」と⑥の「板東」の大学(足利学校)は、14～15世紀に、おのおの「権力者(室町幕府)によって意図的に建設された大学」であった、

ということができましよう——なお、⑤の「近江」の大学が、もし園城寺を指していたとすれば、同大学は、10世紀末に、④の「比

叡山」大学から「分岐して成立した大学」であったこととなります。

さて、ここで注目すべきは、ザビエルが鹿児島の人たちから伝え聞いた中世「日本の主要な六大学」のうちに、「高野」、「根来」という紀伊国の二大学が入っていた、という事実です。むろん、当時の鹿児島の人びとの認識が本当の意味で正しかったのかどうかは、今後、さらに検討する必要がありますが——たとえば、奈良の興福寺をはじめとする諸寺が挙げられていない点などは、気になることです——それにしても、ザビエルが来航した1549年当時に、「高野」、「根来」という紀伊国の二大寺院が、中世ヨーロッパの大学に比肩しうる内実を有する日本の主要なユニヴェルシタスとして、鹿児島の地にまで喧伝されていたことの歴史的な意味合いは大きい、ということができましょう。中世の紀伊国は、現在私たちが想像する以上に、高等教育の発達した、文化の薫り高い国だったのでないでしょうか。「高野」と「根来」とは、それぞれが「三千五百人以上の学生」が闊歩する、「カルティエ・ラタン(ラテン区・パリの大学町)」にも匹敵する大学町だったので

ちなみに、13世紀末から15世紀初頭ごろの「高野」の大学を例に取りますと、当該時期、高野山上の境内地の大部分は、金剛峯寺という名のユニヴェルシタスに、また高野山内の金剛峯寺方に属する各子院は、金剛峯寺ユニヴェルシタスを構成するコレギウム群に、それぞれ相当していたと考えられます。現在もなお、金剛峯寺の伽藍内には、中世以来の伝統を持つ、同寺ユニヴェルシタスの教養学部校舎(勸学院)、密教学部校舎(大会堂、および愛染堂)、そして大学院校舎(山王院)があります。さらに各子院には、会下と呼ばれる学生たちのために寄宿舎が設けられてい

ます。そしてこれらの学舎群は、今もなお存分に活用されているのです。

また、現在、根来寺の伽藍内に立つ大伝法堂は、祖師興教大師覚鑿(1095—1143)以来の法灯を継承する、中世の「根来」大学の密教学部校舎の後身です。

【主要参考文献】

一 中世日本の六大学

河野純徳訳・解説『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』(平凡社、1985年)

河野純徳『聖フランシスコ・ザビエル全生涯』(平凡社、1988年)

島田雄次郎『ヨーロッパの大学』(玉川大学出版部、1990年、初版は1964年)

森 洋・今道友信「大学の発展とスコラ学」(『岩波講座世界歴史10 中世ヨーロッパ世界Ⅱ』1970年)

ジャック・ヴェルジェ(大高順雄訳)『中世の大学』(みすず書房、1979年、原著は1973年)

長尾十三二『西洋教育史 [第二版]』(東京大学出版会、1991年)

矢田俊文「戦国期宗教権力論」(『講座 蓮如』第四巻、平凡社、1997年)

榎尾祥雲『日本密教学道史』(臨川書店1982年、初版は1942年)

根来寺文化研究所『根来寺の歴史と美術』(東京美術、1997年)

〔追記〕初校校正後、一に引用したザビエルの手紙中の「時宗」、「近江」の両語は、松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第一巻(同朋舎、1997年)では、それぞれ「侍者」、「多武峰(別写本、近江)」と訳されていることに気がきました。このうち、「多武峰(寺)」とは桜井市にあった天台宗の大寺院で、現在の談山神社がその後身です。

(初出：山陰加春夫編『きのくに荘園
の世界』上、清文堂出版、2000年)